

Title	神と神を祭る者との文學, 武田祐吉著
Sub Title	
Author	曾根, 研三(Sone, Kenzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.152(622)- 154(624)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第二部は武藏野及其周圍の有史以前であつて先づ「有史以前の東京灣」に於ては貝塚の分布状態よりして當時の東京灣を推定し埼玉の入江、豊島の入江、又は多摩の入江をなし又當時の東京市方面には各所に浮洲があつて當時の民衆即ち漁業を主として生活した薄手派のアイヌ部族は是等の洲をステーションとして丸木舟で往來したのであると説かれてゐる。「武藏野の有史以前」については薄手式派と厚手式派との土器の分布より見て海岸地方には薄手式を使用し漁業を營む一族が居り山地には厚手式を使用し狩獵をなす一族が居たさなし固有日本人は此處へ侵入して來たのであるとしてゐる。武藏野地方より出る有史以前の人骨については種々の論争があるがそれは當時アイヌは其附近に住してゐた固有日本人と接觸した爲め或者は純粹で或者は雜種になつてゐたからであると説き、又伊豆大島の熔岩流下にある遺跡より發見された石器土器等よりして當時大島に住してゐた者は伊豆半島地方で狩獵をしてゐた者が移住したのである事々彌生式土器の發見等よりして原史時代に固有日本人の住居して居た事を明にし、又「石器時代に於ける關東と奥羽との關係に」於ては今日では奥羽の石器時代は關東のそれよりも新しいとの説が信じられてゐたが出奥式土器の分布状態或は土偶等の研究により決して關東より北進して彼等を新しく分布せしめたのではなく當時すでに北方に出奥式あり南方に薄手式又は厚手式が存在してゐたのである即ち此等の三大部族が同時に居つたのであると主張し又「日本石器時代民衆の女神信仰」に於ては土偶、土盤、把手等は殆んど全部女の像又は顔

面であるからして我國石器時代に女神信仰があつたものであつて土偶は神像であり土盤は携帶護符であり顔面把手の土器は宗教上の儀式に用ひられたものであるとなし、更に土偶の分布より見て女神の信仰は或る家族や氏族に限られたものではなく種族全體に行はれたものであり女神護符はこれよりも狭く或る群族に限られる而して此等の女神信仰が我國と最も接近してゐるアツヤ大陸に於てその遺跡が發見されないうで反つて中央アツヤ以西のそれと類似してゐることは注意すべきことであるとなし、結論として原始社會の女の位置及び Earth-Mother の信仰を述べてゐる。

以上は本書の内容の一般である、分り易い口語文で書かれてゐる上に各所と同様のことが繰り返されてゐるので専門外の者が讀んでも充分理解し得る本である。然しその歴史的記述などに至つては我々の賛成し得ない點も多くある様である、從つて學問的に之を見れば相當の批難は免れぬものであらう。博士に依れば本書は他日大なる武藏野と其周圍を出す第一篇なそうである、一日も早く尙十分學術的な組織的な一本を發表されんことを望む次第である。

(今宮 新)

神と神を祭る者との文學

(武田祐吉著)
古今書院發行

冬の筑波嵐にいちめつけられた武藏野の原にも梅が咲くようになつてからホツリ／＼と青みを帯びて來て、何時のまにやら變な格好をして、妙な足取で美事に咲いた櫻の下でざわつくようにな

つた。丁度其五月の初め頃、冬のやうな淋しい穩かな著者の眞理を求めてやまぬ氣持から憧れの瞳を古き代に向けられた時、昔の人々の實際生活の上にイキ／＼と働いてゐる神様と、それから生れた熱のあるノビ／＼とした文學即ち祝詞なるものが横たはつてゐた。著者は此事に對して霧でいぢめつけられ、氷で凍えさせられる苦しさの中に堪えて一縷の因て來る道を見出さうとして歩まれた努力が櫻の時期となつて開きの美しくさを見せたのが此著述である。此の著書の内容についてはクダ／＼しく云ひたくない。一句一句にシツクリさくる力のある研究の結果であると思ふと、すべてが價値づけられて何だか内容を紹介して行く時には、著書を誤解し、其實玉を傷つけるやうな氣もするので批評もやめておかう。然しそれでは餘り物足りなくて何がよいのか外の人には分らないと思ふので少し私の思ふ事を書いて其實玉の圓周だけでも描いて見よう。』其内容の目次を列擧するならば(一)「神と神を祭る者との文學」(二)「上代祝詞の本質」(三)「萬葉集時代に於ける神人の交通」といふ三大眼目から成立してゐて其主眼は最初の(一)に存してゐる事は全體の書名として取られた事によつても知られるのである。其の(一)の「神と神を祭る者」この文學は更に(一)、總序。(二)上代の祝詞。(三)神話の「考察」。(四)神樂歌。(五)、上代歌謡の一泉源。(六)、萬葉集に於ける神事關係の歌。等の六項から形成せられてゐる。従つて(二)「祝詞の本質」或は(三)「萬葉集時代に於ける神人の交通」等は如上六項目の附言として生れて來たものではなからうか。假令附隨として生れて來たこと

でも(二)「上代祝詞の本質」に含まれてゐる(二)上代日本人の言語信仰。(四)たゞ、(三)をへまつる。或は(三)「萬葉集時代に於ける神人の交通」に含まれてゐる(三)すめらぎ。(四)、かむさぶ。(六)、たむけ。(七)、ぬさ。(八)、いはひ。(九)、いはひべ。といふよな言語解釋は流石に多年の萬葉集研究者としての名をはづかじめぬだけの權威が存してゐて、其説明等は混々として盡きぬ泉のうるはしさが流れてゐて著者の人となりをも益々光輝あらしめてゐるよな氣がする。殊に(二)「上代祝詞の本質」に收められてゐる(八)、宣るを申す。の言語の差別を下すに古事記に申ひられてゐる詞から出發して「詔戸、告戸をのりて訓むべくば、詔、告をものるを讀むべく、これに對して曰、奏はまをすを讀んで多分誤つてゐないであらう(中略)萬葉集に於ては、告、つぐ、又は・のるをよませてゐるのるは、他動にも自動にも用ひられる。名をのるをいふのは名を人に示すことを重視した心持である。たやすくいはない。穩密のものをあらはす意味である。占にのるをいふ語法も表面に現れてゐなかつた。(中略)印、のるに、あらはす、あらはるをいふ意味のあることが知られる。而して祝詞ののりもこの意味に近いのではあるまいか。(中略)の事は又、人生を罵言する意味に用ひられてゐる」といはれ、其まをす。については「萬葉集に於ても普通にその對手に向つての敬意を含んで用ゐられてゐる」といひ更に「祝詞のうち宣言で終つたもの、方が申すで終つたものよりもこの形であるといふ事が出來よう。殊に平安朝以後の祝詞は悉く申すの形で、この形が新し

い形であることが知られる。」と云つて其使用の年代を指示しておられる等は一々首肯する事が出来よう。又(は)萬葉集時代に於ける神人の交通」に收められてゐる(十)いのる、まこひのむ。この區別については「いのるまこひ語はまた神に祈るまこひ後世の表現とは反對の、神をいのるまこひ形で始まつた。(中略)いのるまこひ語の内容は(中略)神を祭つてわが願ふが如くなることを期するまこひの意外に把促し得る所は無いであらう。(中略)まこひのむ。の心も亦、神を祭りてわが願ふが如くに有り得ようまこひに在る。」まこひ其結論として「從來の學者のなしてゐる如くに禱をものむと讀むまこひが不都合でないであらう。」と云はれて舊來の説を認容し、敢て新を建てようまこひならぬ所に著者の穩健な研究の態度と天賦の性格とが反映してゐるように思はれる。又、いのるまこひのむ。の續きに、記されてゐる(十一)ちはやぶる。まこひ、たまちはやぶ。の詞についてはちはやぶるが「神の特性のうち、その恐るべき暴き方面を意味してゐるもので、それが普通に神の枕詞として用ひられてゐるのは人の心に神の特性のうち、この方面が特に注意せられてゐたことを示すものである」に對して玉ちはやぶ。は「玉は靈魂生命等の意味の語と思はれる。(中略)神の善意的なる威力を語るものである。」から要するに「ちはやぶるが神の荒き發動を意味するに對して靈ちはやぶるのなごやかなる心持であるまこひを見られるのである。」と斷言せられてゐるのは一點の批評さへ許さないような議論である。

是を通貫するに著者の言語に對する解釋は一々用語例の下に其

明敏な考察と判斷を下しておられる上に、文學的憧憬れよりして、よく上代人に自らがりすまじしての研究であるから量からいへば決して大冊子ではない。が然し、價値に至つては、出まかせに書く大部な近來の出版物を壓倒してゐるような氣がして、決して、美女を左に、紅酒を右にしたる饗宴の寸時の厚くるまこひに濃艶な世界にある櫻花ではなくて、晚鐘ひびきて暮煙たなびひ、俗人既に散じたる後の興趣と涙ぐましいまでの崇高まこひに充たされた永遠性の櫻花なのである。或は又、夜更けて鳴く虫にあはれを添ふる月影に照された萩の花なのである。

(大正十三九廿四脱稿。曾根研三)

石川縣史蹟名勝調査報告第二輯(石川縣編)

本書は石川縣に於ける主要なる社寺の舊跡・古城址及び殖産遺跡の調査報告にして、既刊第一輯(石器、古墳)に接續するものである。收むる處のものは

- (一) 國分寺及び總社遺跡、(二) 礎石及び古瓦、(三) 白山關係遺跡、(四) 石動山舊跡、(五) 俱利伽羅古戰場、(六) 總持寺舊跡、(七) 利生塔婆舊址、(八) 大聖寺城址、(九) 穴水城址、(十) 木尾嶽城址、(十一) 七尾城址、(十二) 小松附近の城址、(十三) 鳥越城址、(十四) 超勝寺舊跡、(十五) 鑄物師舊跡、(十六) 末森城址、(十七) 淺井曠古戰場、(十八) 九谷窯址、附録石立及び石佛
- なほ口繪金澤城址の外圖版、挿入圖、實測圖數十種は何れも鮮明で本文の説明を補足する處が多い。